

水レター「びわ湖・よど川」

2010. 1. 21 【vol.7】

独立行政法人 水資源機構 関西支社 発行

水レター「びわ湖・よど川」は、水資源機構全体の取り組みや淀川水系における取り組みに関する情報、さらに琵琶湖・淀川水系の水源地域情報を関西管内の関係者（利水者、関係府県、関係市町村及びその他関係機関）の皆様に直接配信しています。

目 次

1. アウトカム視点でのダム操作	1 p
2. 琵琶湖と大阪城	2 p
3. 乙訓浄水場施設見学会に参加して	6 p
4. 関西支社中津川管理室の管理について	7 p
5. 水のいのち・雨	11 p
6. 業務改善に向けたアンケートの実施について	13 p
7. 編集後記	14 p

未来へ つなごう びわ湖・よど川の水

◇ ーアウトカム視点でのダム操作ー

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

利水ユーザーならびに関係機関の皆様には、旧年中は独立行政法人水資源機構に格別のご支援ご協力を賜り誠にありがとうございました。

水資源機構関西支社では、川上ダム、丹生ダムの建設事業と高山ダム、日吉ダム等を代表に淀川水系にての7ダムと琵琶湖開発施設等の合計10の施設の管理運営を通しまして、琵琶湖淀川流域での用水の安定的な補給と治水対策等に日々努めさせていただいております。

さて昨今、NPM(New Public Managemet)なる言葉が聞かれますが、これは、供給者の視点(アウトプット)から顧客の視点(アウトカム)への転換ということにあります。ダム管理に適用すれば、供給者(ダム事業者)の論理からユーザー(国民にとっての成果)の論理への転換、つまり創ったダム(湖)が地域やユーザーの方々にとってどう評価されるかという「顧客満足度」の視点に立つことです。

例えば、治水・環境面では、洪水被害軽減を最大限期待する一方で、普段は川らしい川の復元を望むダム下流住民のニーズや満足度に応えることであり、その時々貯水容量や下流河道の状況を加味した洪水被害軽減を最大限発揮するための操作や、河川環境改善のための柔軟な操作が該当します。

前者の事例として、昨年台風18号の襲来時の名張市上流の3ダムの連携操作があります。この台風により、三重県内では総降雨量が300mmを超える大雨となり、名張川が氾濫し被害が発生する恐れがありました。そこで、名張川上流にある3ダム(室生ダム・青蓮寺ダム・比奈知ダム)を管理する水資源機構木津川ダム総合管理所では、名張市街における浸水被害を防ぐため、国土交通省淀川ダム統合管理事務所との緊密な連携と指示のもと、名張川の水位・降雨の状況及びダムの容量等を勘案し、3ダムを連携した洪水調節を行いました。その結果、名張川の水位を約1.5m低下させたことで、名張市街地の浸水被害を回避出来たと想定されます。後日、迅速適切なダムの操作で名張川の氾濫防止に多大な貢献をしたとして名張市長様から感謝状を頂きました。

後者の事例として、一庫ダムでは、ダム下流の魚類等の生き物たちの生息生育環境としての河川環境の改善を目的に、通常操作に比べて洪水期に入って1ヶ月間は洪水調節に支障を及ぼさない範囲で、水位を高めに維持し、河川維持流量を増量して放流するものです。この操作は、貯水量を少しでも長く貯留することで利水安全度の向上となり、結果的に利水ユーザーの方々にも歓迎され、評価もいただいております。

これらは、地域の人々のニーズつまり国民にとっての成果(アウトカム)をダムという装置でいかに効率的に達成するかの視点での満足度の提供です。

私たち水資源機構は、水とともに利水者をはじめ広く流域の皆様からの多様なニーズやご期待にお応えしていきたいと考えております。

本年も、さらなるご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

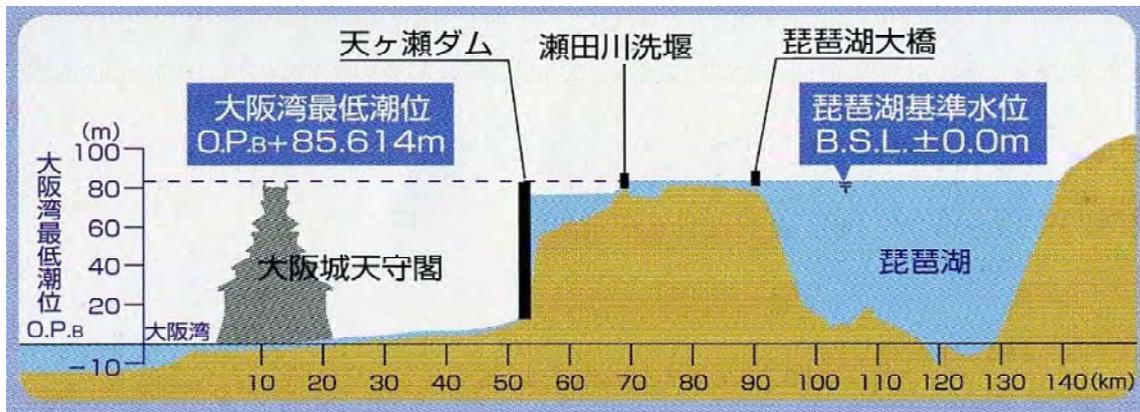
2010年 庚寅正月

水資源機構 関西支社長
原 稔 明

◇ 琵琶湖と大阪城

大阪府水道部長 吉田八左右

琵琶湖の水位を表す基準となる琵琶湖基準水位と大阪城天守閣の高さが同じだと言われている。ちなみに、琵琶湖基準水位は「O. P. + 85.6 m」であり、大阪城天守閣の鯨の尻尾は「O. P. + 87.2 m」で、鯨の高さは2.2 mである。したがって、厳密には異なっているように感じるが、「O. P.」の高さが明治13（1880）年の決定以降、地盤沈下等の影響により何度か変遷していることも考慮すれば、琵琶湖基準水位と大阪城天守閣の屋根瓦の高さは、やはり「同じ高さである」と言っても良いと思われる。



しかし、疑問なのは「何故、同じ高さなのであろうか」ということである。琵琶湖・大阪城両博物館には、この疑問に答える記録は残っていない。そこで本稿では、私なりに推察したことを記述したい。

まず、琵琶湖基準水位だが、これは明治7年に決定されている。「O. P.」の決定に活躍した一人であるオランダ人技師エッセルの指導により、琵琶湖の水の唯一の出口であった瀬田川に架かる瀬田唐橋の中之島（鳥居川という地名）に量水計が設置され、当時の河床高と最低流出量等から考えて「これ以上水位が下がることは無い（マイナスの水位が無い）だろう」と判断した水位が、琵琶湖基準水位として決定された。最低水位に着眼したのは「O. P.」と同様であるが、かなりいい加減な話だと言える。

しかし、考えてみれば、「T. P.」が決定されたのは明治17年であり、明治7年当時はまだ、日本全国の正確な標高は何も測定されていなかったのだから、「琵琶湖

の水位を管理する」という目的を達成するためには、「一度決めた基準を決して動かさないことにすれば良く、どのように基準を決めても支障は無い」との判断であった。他の基準に基づく標高と比較する必要がある場合には、基準同志の比較測量をして換算すれば良いのである。

ところで、現在では、琵琶湖の水位が「マイナス」というのが珍しくなくなっている。これは、南郷洗堰（現在の瀬田川洗堰の先代）が完成した明治38年頃に、瀬田川の浚渫も行われて河床が低下し、瀬田川の流下能力が一気に増加したからである。出て行く水量が増えれば、琵琶湖の水位が下がるのは当然である。

一方、現在の大阪城天守閣は3代目である。

初代は、1585年に秀吉により完成したが、1615年の大阪夏の陣で破壊されている。2代目は、1629年に徳川幕府により築造されたが、1665年の落雷で消滅している。そして、現在の大阪城天守閣は、昭和6（1931）年に市民の寄付により再建されたものである。

3代目として大阪城天守閣を建設するに際し、「秀吉時代の天守閣（大坂城天守）を復元する」という方針が決定されたものの、当初、工事関係者は困ってしまった。大坂城天守に関して伝承されていたのは、「地上5層6階である。安土城天主が信長の御殿であったのに対し、大坂城天守は宝物蔵として使われ、見物の大名達は、2階と最上階の6階でひと休みして茶菓のもてなしを受けた。地階は武器蔵で、天守東南には櫓が付随していた。」ということぐらいで、高さはもちろんのこと、構造等の詳細が不明だったのである。なお、お城の本丸を、信長は「天帝」と同じ意味の中国語である「天主」と呼び、秀吉以降は「天守」と呼んでいる。

そして、復元の根拠となったのは、黒田家旧蔵の黒田屏風と呼ばれる「大坂夏の陣図屏風」だと言われているが、もちろん屏風絵だけで復元できるものではない。実際の具体的な復元方法としては、以下のとおりで、その結果、5層8階（内、地下2階）、高さ54.8mの大坂城天守の「昭和の復元」が完成したのである。

- ・秀吉時代の天守台については全く分からなかったので、徳川幕府築造の天守台石垣上に大坂城天守を建てることとした（徳川幕府の築造の際には盛土が行われている）。

- ・元徳川幕府の京都大工頭だった中井家に所蔵されていた「大坂御城小指図不審ノ所々可相改」という上書きのある袋に入った2枚の図、「豊臣時代大坂城本丸図」に、本丸と内堀の石垣の線、建物の平面が描かれ、井戸の位置が示されていた。そして、これを現大阪城の実測平面図に重ねると、全体としてよく重なるだけでなく、本丸の北側の石垣、南側の石垣の線は驚くほどよく対応していたので、これを参考にした。
- ・天守構造の復元に際し、安土城や大和郡山城、そして松本城をはじめとする各地の天守遺構をよく調べると、天守の設計上重要な全高の決め方に、一定の原則があることが分かったので、大坂城天守の全高もそれに基づいて決定した。

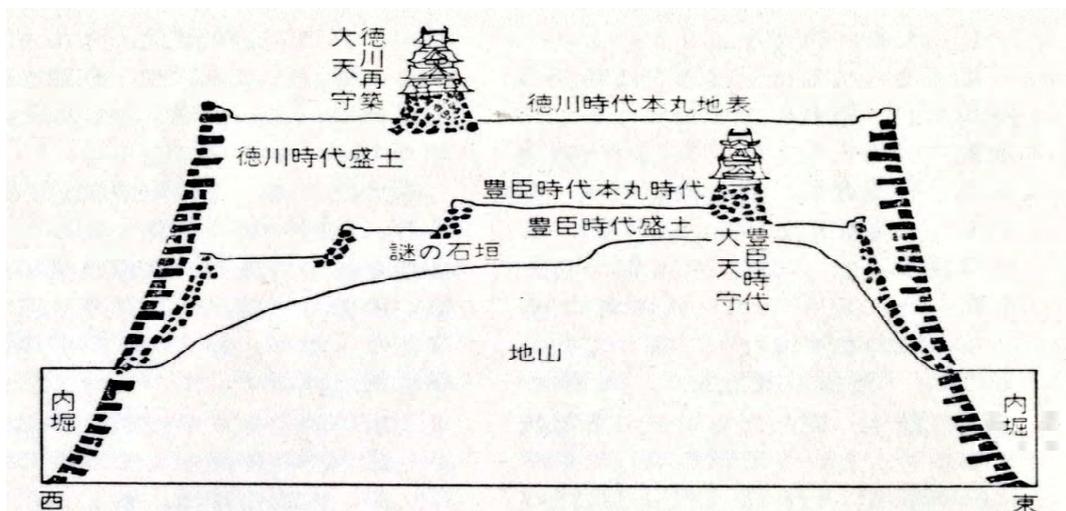


図-11 豊臣時代と徳川時代の本丸比較（資料：「大坂城天守閣所蔵名品展 秀吉と大阪城図録」より）

つまり、琵琶湖基準水位の決定は明治7年であり、今日の3代目大阪城天守閣はそれより後年で、昭和6年の築造である。また、大坂城天守を復元したとはいうものの、精確な資料に基づいたものではないので、天守台の高さに天守閣の全高を足した高さは、ある程度自由に設定することが可能だったと言えるのである。ちなみに、「3代目天守閣は、初代よりも大きく、2代目よりも小さい」と、今日では言われている。

そして、「琵琶湖基準水位と大阪城天守閣の高さが同じなのは、偶然ではなく、人為的な意図があったのではないか」という私の長年の疑問は、ある募金活動をした時に答が出てきたのである。

昭和6年の大坂城天守の復元に際しては、市民7万8千人から浄財が集まり、当時の金額で150万円だったと言われている。今の金額に直すと約700億円で、莫大な金額である。募金活動を経験して分かったことは、「募金総額の大部分は、大口の寄付をする少数の人に依存している」という事実である。一人でも多くの一般市民が寄付することは美談にはなるが、金額的にはそれほど多くを期待できないのである。

それでは、大口の寄付をしてくれる人とは誰であろうか？

それは、近江商人の流れを汲む大阪の企業である。主な企業を現在の社名で記すと、高島屋、大丸、伊藤忠商事、東洋紡、日本生命などが挙げられる。

そして、ここで肝要なことは、「大口寄付の企業に対して、募金する側が感謝の気持ちを現わそうとする」ことである。しかし、大口寄付の企業の意向を個別に表だつて実行するのは愚策であり、そんなことをすれば「市民の浄財で復元」という最大のPR効果が消滅してしまう。

最善の策は、大口寄付をしてくれた企業の共通認識である「近江の国」の何らかを、大阪城そのものに何らかの形として、それとなく残すことである。そして、それを記録として残さないことである。

その答えが、「琵琶湖基準水位と大阪城天守閣を同じ高さにする」ことだったのでないだろうか。そうすることにより、大阪に進出して企業活動をする近江商人が、大阪城天守閣を仰ぎ見る度に、「ああ、あの高さだ」と、故郷・琵琶湖の水面を思い浮かべることができるようにしたのである。

そして、さらに、「大繁盛」という企業共通の願望を「大阪城」に託したのではないだろうか。つまり、「大阪城」を「だいはんじょう」と読んだのである。だからこそ、大阪城は、「商都大阪」のシンボルとして位置づけられているのである。

みなさんは、どう思われますか。



(大阪城)

◇ おとくに 乙訓浄水場施設見学会に参加して

一庫ダム管理所 信田 玲佳

平成21年12月17日に行われた利水者施設の見学会に参加しました。この見学会は、私達水資源機構の職員が、利水者との交流の一環として利水者が実施する事業を理解することを目的としています。今回お世話になったのは、京都府営水道事務所乙訓浄水場です。

京都府営水道は、3つの浄水場で7市3町に水を送水しています。乙訓浄水場は、平成12年10月から2市1町に給水を開始しました。1日に最大46,000m³を給水しています。施設自体はコンパクトにまとまっている印象を受けました。乙訓浄水場は4.5km離れた日吉ダム下流の保津川から取水し、導水トンネルで浄水場へと水が送られてきます。約80mの高さを導水ポンプで揚水した後は、自然流下で浄水処理が行われており、効率的な処理がなされていました。また、薬品沈殿池の上には、太陽光パネルが設置されており、太陽光発電で得た電力は管理用で使用しているなど、環境に配慮した取り組みも行われていました。

見学会では、福山場長、香川場長補佐、担当の林田様から概要説明を受けた後、施設の案内をしていただきました。説明では、実際に残留塩素を求める実験をしてくださるなど、とてもわかりやすく、京都府営水道の事業概要から浄水処理までとてもよく理解することができました。また、今回は普段の見学ではあまり見るところがないという、導水ポンプ室も見学させていただきました。導水ポンプ室までは、インクライン設備を利用します。階段も有りましたが、私が勤める一庫ダム堤内の階段の段数より数が多かったのでこの日は断念しました。(ちなみに一庫ダム堤体内の一番長い階段は289段です。)

今回の見学会を通して、今後も水質管理など常にきめ細やかな操作を行わなければならないと、より一層強く感じました。乙訓浄水場は通常の沈殿ろ過の処理を行っていますが、将来高度処理を行う場合を見込んでの土地が用意されていました。高度処理を行わなくても良いよう、水質等についてダムだけでなく、河川など流域社会全体できれいな川(水)を保たなければならないと思いました。

私が勤める一庫ダム管理所は、水道用水を供給する役割も持っています。しかし、



(見学風景)

水道障害の原因にもなり得るアオコと呼ばれる植物プランクトンが、毎年発生しています。特に平成21年度は、カビ臭を発生させるアナベナという種類が発生しました。一庫ダムでは、水質保全設備である浅層曝気設備や深層曝気設備を運転し、水質保全に努めました。また併せて、放流設備である選択取水設備で、下流河川に配慮した水温及びアオコの密度が極めて低い水深を適確に選択し放流しました。また兵庫県企業庁多田浄水場の適確な運用が行われたことによって、水道障害は発生しませんでした。

現在一庫ダムでは、管理特定業務積立金を活用し、浅層曝気設備を増設することを計画しています。「管理特定業務積立金」とは、治水交付金や利水負担金等の通常管理費ではなく、水資源機構独自の財源です。浅層曝気を増設し、今後数年かけてアオコの発生抑制の実証実験を行いながら水質保全対策を積極的に行う予定です。

最後になりましたが、京都府営水道事務所乙訓浄水場の皆様におかれましては、お忙しい中施設の説明、案内をしていただき、誠にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。

◇ 関西支社中津川管理室の管理業務について

中津川管理室室長代理 二井正広



(高見機場付近航空写真)

「関西支社中津川管理室」は、「正蓮寺川利水事業」によって建設した「正蓮寺川分水施設」と「工業用水導水施設」を管理している事務所で、大阪の中心である梅田より西に約 3.0km の淀川左岸堤防沿いにあります。

事務所周辺は、建設当時多数あった工場は移転し、跡地には高層マンションが建ち並び都市住宅街に変貌しています。

「正蓮寺川利水事業」は水需要の逼迫する阪神地域の緊急利水事業として昭和 41 年に計画されたも

ので、中津川を埋め立て、中津川の河川維持用水 8.5m³/s を都市用水に転用（水道用水、工業用水併せて 12 団体が利用）するために「正蓮寺川分水施設」と「工業用水導水施設」を建設したものです。

このうち「正蓮寺川分水施設」は、淀川左岸に設置した高見機場より、中津川の埋め立てにより閉鎖水域となる正蓮寺川と六軒家川へ淀川から最大 22.0m³/s の河川水を導水する施設であるとともに、台風等の高潮時には正蓮寺川と六軒家川の内水を淀川に排水するための排水施設でもあります。

「工業用水導水施設」は、中津川の埋め立てにより工業用水を取水出来なくなる工場に対して新たに導水路を設置して工業用水を供給する施設です。

「正蓮寺川分水施設」の主要施設である高見機場は、淀川の下流に位置し、淀川の水が感潮水（海水）であるために、様々な貝類が付着することと、上流から流れて来るゴミ対策に苦慮しており、その対策についての取り組みを紹介します。



1. 貝類の付着対策

高見機場は、カワヒバリガイ等の貝の付着が多いことから、ゲートの開閉機能を維持するために、定期的にゲートを昇降させて貝の付着軽減を図っていますが、付着が多いときはゲートが開閉出来なくなる場合があります。

（機場水槽内の貝の付着と土砂堆積状況） このため、ゲートや水槽のコンクリート表面には、貝が付着しないように特殊な塗装を行っています。

また、冬期には、ポンプ運転を停止して、機場の水槽に溜まった土砂や貝類の除去工事及びポンプ、ゲート、除塵機の維持整備工事を実施しています。



(除塵機ホッパーから溢れ出たクラゲ)

2. ゴミ対策

高見機場付近の淀川は、川の生物と海の生物が同居しており、スズキ・ボラ・ウナギ等が多数生息しています。

これらの生物に混じって毎年春と秋には多数のクラゲが発生します。

クラゲはほとんどがミズクラゲで、近年日本海で異常発生するエチゼンクラゲは見られません。

このクラゲが大量に発生すると除塵用スクリーンに大量に引っ掛かるため、ポンプ運転が出来なくなることもあります。

また、異常発生により除塵機ホッパー（除塵したゴミ等を溜めておく施設）から溢れ出て、ホッパー周辺や隣接する下水処理場までクラゲが溢れ出て、周辺がクラゲだらけになったこともあります。



(淀川の水面)

高見機場は、上流から流れて来る大量のゴミ対策にも苦慮しています。左の写真は、昨年10月の台風18号の洪水後のゴミの撤去状況の写真です。

ゴミはほとんどがヨシの枯れ草とウォーターレタスであり、ペットボトル等の生活ゴミも混じっていました。



(取水施設に漂着したゴミの撤去状況)

これらのゴミにより取水施設のスクリーンが詰まって、取水障害を引き起こすため、職員が出動して漂着したゴミを撤去します。

台風18号のゴミの撤去には延べ4日間実施し、慣れない力仕事のため、疲労困憊のあまり、歯茎が腫れた職員も出たほどでした。

高見機場は、このように貝類の付着や上流からのゴミ等に苦慮しているところですが、ポンプ運転に支障がないように適切に対処していく所存です。

また、高見機場の屋上は、地上2階の建物の屋上であるため見晴らしもよく、施設や周辺地域の説明資料を整備しており、施設見学を希望される方がありましたら案内させていただきますので、よろしくお願いします。



◇ 水のいのち・雨

関西支社総務部 青山政広

合唱の経験のある人なら、誰でもご存知と云うべき曲で、合唱界でのスタンダードである「水のいのち」という合唱組曲をご紹介します。合唱組曲「水のいのち」は全部で5曲。それぞれは「雨」「水たまり」「川」「海」「海よ」という題名を持ちます。全体は地上に雨が降り、水たまりができてそこから川となって下流へ下り、海へとそそぎ込み、ひとしきりよどんだあと、再び天へ上っていくという具合に、水の大循環を題材にしていますが、私たちの人類の億年の昔から続けられている生の営みと重なり、個々の小さな人間がそれぞれ生まれ、思い思いの生き方をして、最後にはまた同じところに帰り着き、そしてまた繰り返されるという非常に雄大で、哲学的雰囲気を持ったものとなっています。名古屋市生まれの作曲家高田三郎（1913～2000）が詩人であり数学者である高野喜久雄（1927～2006）の詩に曲を付け、TBSからの委嘱作品として1964年に発表されたものです。それから50年近く経ちますが、当初は混声合唱で歌われていましたが、女声合唱曲や男性合唱曲にも編曲されているいろいろな合唱団が常にどこかで歌っているのではないかと思います、美しい曲です。

「水のいのち」の最終曲「海よ」

ありとある 芥
よごれ 疲れ果てた水
受け容れて
すべて 受け容れて
常に新しくよみがえる
海の 不可思議

休まない 汀
波の指 白い指 くりかえし
うまず くりかえし
億の砂 億の小石を
数えつづける
海の不可思議

くらげは 海の月
ひとでは うみの星
そして 深く暗い 海の底では

したから上へ
まこと 下から上へ
雲は
白い雲は降りしきる

おお 海よ
たえまない 始まりよ
あふれるに みえて
あふれる ことはなく
終わるかに みえて
終わる こともなく
億年も むかしも いまも
そなたは
いつも 始まりだ

のぼれ のぼりゆけ
そなたは 水のいのちよ



たとえ 己の重さに
逆らいきれず
雲となり
また ふたたび降るとしても

のぼれ のぼりゆけ
みえない つばさ
いちずな つばさ あるかぎり
のぼれ のぼりゆけ
おお

この詩に曲が付きこの合唱を一度聞くと、もうそれはこの曲のとりことなること請合います。

もう一曲 合唱界の小椋 佳といわれる多田武彦（1930生）の男声合唱組曲「雨」をご紹介します。京都大学を卒業後銀行に入り、音楽が好きで特に合唱が好きで、業務の傍ら作曲活動を行い、数多くの合唱曲を作曲しており、男声合唱に関係する人からは「タダタケ」の愛称で親しまれています。東京の大学のグリークラブから委嘱され、詩人伊藤整、大木淳夫、八木重吉らの詩6編に曲を付け男声合唱組曲「雨」として1967年に発表されました。「雨の来る前」「武蔵野の雨」「雨の日の遊動円木」「雨 雨」「雨の日に見る」「雨」の6曲で構成されており、その6曲のそれぞれが雨の日の情景や雨の降り方などが雨の大事さ、天然の恵みと合わさり、人間の孤独感や悲哀感などが一緒に表現され、私たちに一種の癒しを与えてくれていると思います。第6曲目の「雨」は「タダタケ」曰く「私の臨終における鎮魂曲として、私の心の奥深く刻み込まれてしまった。」というほどの名曲で、トップテナーのソロにあこがれて男声合唱を始めた人もおられるくらいです。

「雨」第6曲「雨」 作詞八木重吉

雨のおとが きこえる
雨がふっていたのだ。
あのおとのように そっと世のために
はたらいていよう。
雨があがるように、静かに死んでいこう。

これもアカペラの男声合唱を代表するすばらしい曲で一度お聴きになることをお奨めします。

以上、四季を持つ日本は昔から四季折々の雨が降り、これを体感している私たちの



生活があります。そして四季があり、季節により異なった雨が降り、その中ですばらしい歌や曲が生まれ、私たちの生活を豊かにしてくれています。

周りには、水や雨に関するいろいろな詩や歌があります。私たちの仕事は水や雨との係わり合いが深く、水や雨に関する詩や歌を知れば知るほど私たちの仕事に潤いが出てくるような気がします。地球にある水のうち私たちが淡水として利用できる水は全体の0.8%程度であるといわれています。そして我が国の年間降雨量は6,000億m³といわれ、世界でも水資源に恵まれた国の一つです。この恵みの雨を利用して私たちの

◇ 業務改善に向けたアンケートの実施について

関西支社 利水者サービス課長 武田 浩一

水資源機構では、業務運営の改善を目的に、水資源開発公団が水資源機構に移行した平成15年度から毎年、すべての利水者の皆様（関係都府県の企画部局等を含む。）に対してアンケートを実施しています。

このアンケートは、当機構の職員の仕事ぶりを、業務全般、皆様への対応（対応マナーや対応の迅速性など）、情報提供・説明責任（説明の時期や内容など）、技術（施設建設や水質保全など）、コスト縮減の取り組み（建設事業および管理業務のコスト縮減）の項目について5段階で評価していただき、一部の項目については具体的なご意見を記載していただく様式になっています。

アンケートの結果は、水機構全体で集約し傾向を分析し、職員はもとより、アンケートにご協力いただいた利水者の皆様にもお示ししています。また、各支社・局においては、アンケート結果をもとに業務の改善方針をとりまとめ、定期的にフォローアップしているところです。なお、アンケート結果は主務省の独立行政法人評価委員会での評価資料の一部とさせていただきます。

私どもの関西支社においては、厳しい評価をいただいた項目について、職員間での議論を踏まえて対応方針を作成し、管内のすべての職員にその内容を説明した上で、職員が一丸となって皆様のご理解が得られるよう業務改善に努めているところです。

平成21年度のアンケートは、水機構全体で合計173団体に対して依頼しており、平成22年1月末を目途に集約する予定で、関西支社管内では、昨年末から新年にか

けまして、関西支社の総務部長、利水者サービス課長、各事務所の所長が、利水者の皆様（関係府県の企画部局等を含む25団体）のところにお伺いし、アンケートの依頼をさせていただきました。利水者の皆様からいただいたご回答につきましては、職員が出向いて、ご意見を直接お聞きすることになっています。大変お忙しいところ誠に恐縮ですが、よろしくご協力の程お願い申し上げます。

◇ 編集後記

新しい年になり、思いも新たに、なにかいいことのある一年にしていきたいものです。この水レター「びわ湖・よど川」も今年で3年目に入り、だいぶ皆さんの目になじんできたのではないかと思います。編集委員一同、内容を少しでもよりよいものにしていくようにがんばりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

今回は大阪府水道部の吉田部長様より投稿いただきました。琵琶湖の水位と大阪城の天守閣の高さがどうして同じであるのか、また大阪城をダイハンジョウと読む話は大変興味深いものでした。また、昨年秋に木津川上流ダム群を施設見学された大阪府水道部職員の方から次のようなご意見を頂いております。

「・・・川がおだやかに流れている、水害がおこらないなど、当たり前かのように思っている裏には皆様の毎日毎日24時間のご尽力があるということを感じました。本当に有意義な一日でした。ありがとうございました。」

「・・・台風18号襲来時には記録的な降雨により3ダム連携のもと放流量を調節した結果、名張市を洪水の危機から救ったことを聞き、その裏側での緻密なダム操作判断など短時間で困難な決断を下されたことも併せて感動を受けました。」

「今回特に10月8日の名張市集中豪雨での洪水調節の話は感動ものでした。」
私たちの日頃の苦労が吹き飛ぶ、励みとなる温かい感想を頂いたことに改めて感謝申し上げます。

クイズです。大阪では自転車のハンドルに、傘をたてる器具がついているのをよく見かけますがこれの正式な名前はなんというのでしょうか。答えは後のほうで！

大阪府内の自転車保有率は1人あたり0.8台で、都道府県別で全国でトップだということです。さすが大阪です。この不況時にエコロジーの最先端をいき、少しでも節約しようという人が多いのではないかと思います。水機構でもコスト削減が一番の課題です。ダム管理や建設においてもいろいろな場面でエコを感じるアタマで業務を楽しく進めて参りたいと思います。答えは「さすべえ」でした。

水レター「びわ湖・よど川」に対して、ご要望、ご意見等がございましたら、
下記アドレスまでご連絡下さい。（耳寄りな情報もお待ちしています。）



<mailto:w-kansai@msg.biglobe.ne.jp>

水資源機構関西支社ホームページ <http://www.water.go.jp/kansai/kansai/index.html>